

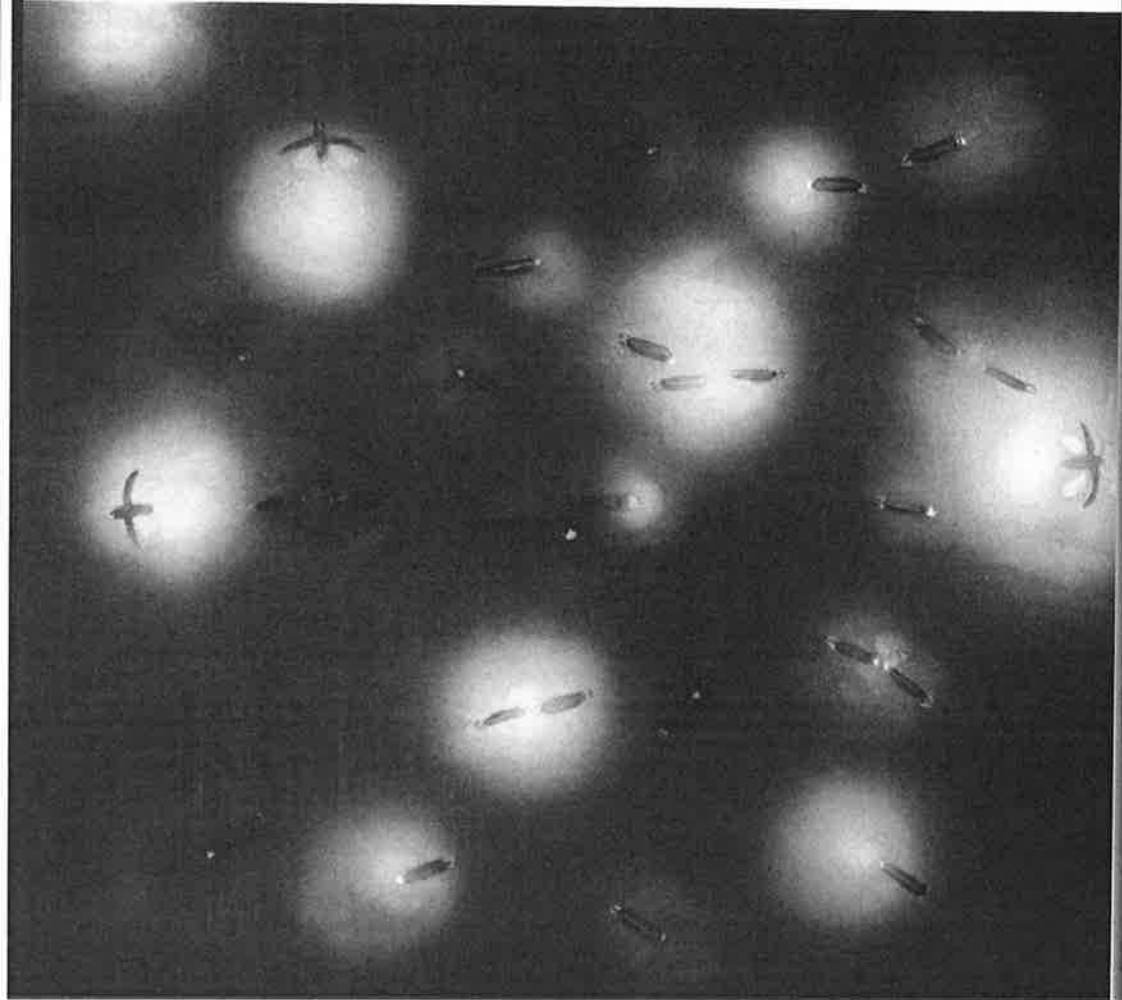
文藝春秋

大正十二年一月三十日第三種郵便物認可
令和元年七月一日発行(毎月一回一日発行)
第九十七巻第七号(六月十日発売)

グレッグ・ケリー **前代表取締役** 独占告白

西川に日産社長の資格はない

男系か 女系か 「愛子天皇」大論争/認知症は怖くない 七月特別号



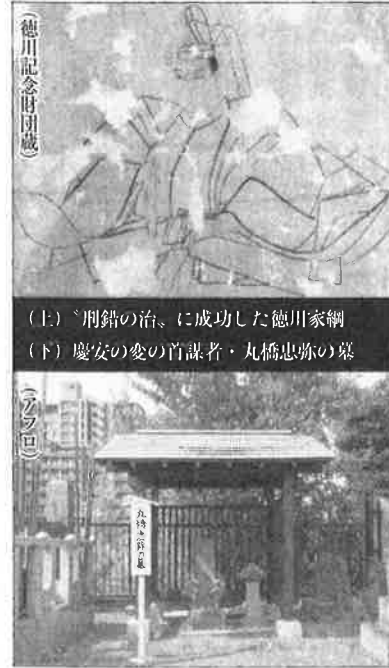
將軍の世紀

やまうち まさゆき
山内昌之

武蔵野大学特任教授・
東京大学名誉教授

「第十九回」武装せる失業者と飢饉

武断政治から文治主義へ——。
十一歳で將軍になった四代目・家綱が高く評される理由とは。



(上) 刑錯の治、に成功した徳川家綱
(下) 慶安の變の首謀者・丸橋忠弥の墓

一、騒乱と飢饉の予兆か

——近年噴火しなかった浅間山は、考えられないほどに噴火し、浅間の方角から風が吹く時は、江戸にも火山灰が降ります（やけほこりふり申し候）。浅間山は、関ヶ原合戦と大坂の陣に際しても大噴火し、越前家（忠直）の事變の時も小噴火した由です。いつも噴火するわけではありません（つねニハやけ申さず候）。また、三月十三日夜に格別の「ひかり物」が飛び、その後、昼七ツ時（十六時）にも「ひかり物」が飛びました。下々は何かと詮索しています。

これは寛永八年（一六三一）四月一日に細川忠利が父三齋に宛てた披露状である（『細川家史料』十）。説明しがたい奇異な自然現象は、人の謎めいた運命とともに、いにしえから日本人の心をとらえてきた。浅間の噴火や想像もつかない「光り物」の背後に、「下々」は歴史が変化する予兆を感じ、騒乱が起こるのか飢饉が生じるのか、と不安に思ったのだ。忠利は、家光によって所領を奪われ高崎で自刃を迫られる駿河大納言忠長の悲運を予知したのだろうか。忠利は、秀忠の死も近づいた現在、弟を自裁に追いこむ將軍家光の治政に危うさを感じたの

かもしれない。忠利の悲観はまだ続く。

——去る五月八日、江戸は雷雨に見舞われました。

江戸から十里離れた八王寺（子）なる山あいでは大きな霰が降り、無数の狐・狸・鳶・鳥が死にました。御鷹場でしたので、鳥や獣も江戸城に持参しました。霰の粒の周りは一尺五寸（約四十五センチ）で、それより大きな霰もあります。それも御城に持参しましたが、途次で融けた中には握りこぶし三つほどの霰もありました。人も多数死亡し、多くの負傷者も出ています。江戸だけでなく、鎌倉の海では「龍水」（荒波）が巻き起こり、伊豆からの舟十艘のうち五艘、十人が助かったにすぎません。しばらくは声も聞こえていましたが、まもなく行方が知れなくなりました。鎌倉にも大きな霰が降り、家を打ち壊して死人も出ました。霰の降った所では苗もすべてだいなしになり、田地も荒れるに相違ない由です（寛永八年五月十五日付三齋宛忠利披露状『細川家史料』十）。

この霰は今で言えば雹のことだろう。忠利は、とくに五月八日にこの「仕合」になったのも、豊臣秀頼十七年忌のせいだと噂されていると述べ、木曾や飛騨も山火事に見舞われ、浅草寺の神木も中から火が出た上に、増上寺の塔も夜々に火を出すという流言が飛んでいると紹介した。

この社会不安をやがて生じる島原の乱のさきがけと見るのは、あまりにも安易な歴史の遡及的解釈にすぎない。とはいえ、近世小氷期なる寒冷期にすっぽり入った江戸時代でも、元和・寛永年間には第一小氷期と呼ばれ、非常に寒冷だった事実を当時の人は知る由もない（倉地克直『江戸の災害史』。寛永十七年（一六四〇）から十八年に頻発する災害や冷害の先触れは、寛永十七年の渡鳥駒ヶ岳の噴火であった。幕末の松前藩儒者の新田千里によれば、「六月十三日内浦岳火ヲ噴ク、砂天空ニ満チ昼暗キコト二日、岳下ノ近海暴漲シ船ヲ破ル一百餘艘、民夷溺死スル者七百餘人」とある（『松前家記』）。内浦から上国（現檜山郡）まで焼灰が降り、「クラヤミ」が続いて松前から見る雲の様子といえは紫雲が色々に出ながら、灰を四方にふらせた記録も残っている（『松前年々記』）。灰の被害は津軽にも及び、その地の飢饉の遠因ともなった。さぞかし災害復旧はどこでも大変だったであろう。寛永十八、十九年の凶作と十九、二十年の大飢饉は、全国に五万とも十万ともいわれる餓死者を出した。まさに家光治世の晩年に画竜点睛を欠く結果となった。寛永十五年に始まった牛疫病による大量死は、十七年末にはほぼ全国に波及し、九州では耕作に使うべき牛が全滅に近くなる。しかも元和・寛永小氷期の天候不順や